

わが国初の情報将校

福島 安正

教育問題プロジェクト・チーム

榎本 眞己 陸自71

1 はじめに

今回は明治の中頃に世界で初めて一人でユーラシア大陸を馬に乗って横断した陸軍軍人の福島安正を紹介しましょう。



福島安正少佐（出発時）

当時、40歳の福島安正はドイツのベルリン公使館付武官の任を終え、日本に帰国することになりました。ドイツから日本への当時の通常の帰国手段は船です。しかし福島安正は船ではなく、陸路で帰国することにしたのです。当時、自動車も開発直後のため道路も未整備ですし、鉄道はまだまだ敷設されていません。そこで馬に乗り、たった一

人で1892（明治25）年の2月にベルリンを出発し、厳寒のシベリアを横断し、翌1893（明治26）年6月に極東のウラジオストクに到着するまでの1万4千kmを、1年4カ月かけてユーラシア大陸を横断するという大冒険を成し遂げたのです。（本横断は一般的に「シベリア横断」と呼ばれています。しかしドイツのベルリンを起点としヨーロッパ大陸を横断した後、シベリアを横断していますので、本稿では榎本武揚の「シベリア横断」と区別するために「ユーラシア大陸横断」と述べます）

この生きて帰国できるという保証もない過酷な単騎ユーラシア大陸横断を成功させた福島中佐（当時）は、ウラジオストクから船で日本海を渡り、長崎から神戸に向かいます。そしてその後は歓迎式典が行われる東京まで鉄道で移動します。

その立ち寄りの先々で熱狂的な国民の歓迎を受けます。そして毎日、その状況が新聞で報道されます。例えば、東京朝日新聞の1893（明治26）年6月13日の一面トップ記事のタイトルは『福島中佐浦港（筆者注：ウラジオストク港）に着す』です。そして30日には『福島中佐帰京』と題し、新橋停車場に集まった多くの老若男女の歓迎、上野不忍池横で行われた歓迎式典

の様子が事細かく報道されています。当時の国民の熱狂的な歓迎ぶりを知るため、東京朝日新聞の『停車場近傍の雑踏』という報道記事を紹介します。「此日かねて歓迎の為に狂するが如くなりし有志者は言うに及ばず此絶大の偉業をなしたる此全国人士の歓迎を受くる福島中佐其人の容貌喝采なりとも一見せばやと四方より集まり来る老若男女は其数果たして幾千万なるを知らず、さしにも広き新橋停車場構内も未だ中佐の着せざる午前十時頃よりして早立錐の地だも余さざる程なりしかば、是を取縮らんが為めに出勤したる警官等は何れも手を振り声を怒らし頻りに昇降口よりの通行路を広げんとあせれども随つて制すれば随つて集まり到底之を取縮り得べくもあらざるより遂に停車場へは一人も入れざることに決定し群衆を場外へと追出したり。追

い出されたる群衆は一時に停車場へ溢れたるより場外は左ながら鼎の湧くが如く押しつ押しされつ雑踏喧騒するさま恰も大波の一時に崩れ寄りしが如し然れば警官は総がかりにて群衆を制止し、辛うじて場外広場に通行路を作り

両側に警官間隙なく佇立して警戒を加えたり」（筆者注：原文はカタカナ交じり文）
いかに国民が歓喜し熱狂的な歓迎をしているかがわかります。またこの単

騎ユーラシア大陸横断成功のニュースはヨーロッパをはじめアメリカでも大きく報道されました。

このように当時、単騎でユーラシア大陸を横断するという大冒険を成し遂げ、国民から熱狂的な歓迎を受けた福島安正という軍人は一体どのような人物なのか、その全体像を把握するためまず概略の経歴を見てみましょう。その後、困難なユーラシア大陸単騎横断がどのようなものであったのか概要を紹介します。そして福島安正が何故このような単騎横断という途方もない大冒険を行ったかを説明した後、どうしてそのような事ができたかを考えてみたいと思います。

2 福島安正の略歴

福島安正は1852（嘉永5）年、信濃の国・松本城下（現・長野県松本市）に松本藩士・福島安広の長男として生まれます。決して裕福な家庭ではなかった安正ですが、1867（慶応3）年、江戸に出て幕府の講武所で洋式兵学を学び（15歳）、戊辰戦争には松本藩兵として参戦します。1869（明治2）年、苦学しながら江戸において外国語を学びます（17歳）。そして1873（明治6）年4月、明治政府に英語訳官として仕官し司法省に務めます（21歳）。翌年、台湾征討準

備のため英語のできる者を募集する陸軍省に移ります(22歳)。この際の試験ではアメリカ独立戦争史を論じ試験官を圧倒し一発合格しました。

1876(明治9)年7月から10月まで西郷従道に随行し、アメリカファイラデルフィア万国博覧会を視察します。

1877(明治10)年の西南戦争では征討総督府の書記官を務め、そのきびきびとした働きぶりで山県有朋に認められます。これにより翌1878(明治11)年5月、陸軍中尉に登用され(26歳)、同年12月、山県参謀本部長伝令使に就任します。伝令使とは秘書であり、その主たる業務は情報を提供することです。この時から情報参謀としての適格性を認められ始めたのです。また直接山県に仕え、その指揮ぶりとの無さ、過酷なまでの冷静さを学びます。

1879(明治12)年3月、陸軍教導団歩兵大隊付となり、同年12月、参謀本部管西局員に異動。清国、朝鮮などを实地調査し『隣邦兵備略』を著わし、山県に提出します(27歳)。当時あまり知られていないこの方面の内情を詳しく調査した結果を著わした本書で安止は一躍、情報将校として第一級の評価を受けます。これにより1883(明治16)年2月、陸軍大尉に昇進。同年6月、清国公使館付武官となりま

す(31歳)。安止はこの間、清国軍事顧問として清国の兵部部門に潜り込み、11名の清国官吏を部下として使い、その軍制、兵力配備、戦略・戦術などを聞き出し、65巻からなる『清国兵制類集』という大作を著わし、山県や当時参謀本部次長であった川上操六などの舌を巻かせ、情報将校としての地位を不動のものとしま

す。1884(明治17)年11月、参謀本部管西局員兼伝令使に就任。1886(明治19)年には英国の東洋進出状況に鑑みインド、ビルマ方面を視察し1カ月半という短期間に上下2巻からなる『印度形勢摘要』を著わします(34歳)。

1887(明治20)年にドイツのベルリン公使館に駐在武官として赴任(35歳)。1888(明治21)年、陸軍少佐に昇進。また赴任翌年にはロシア帝国がシベリア鉄道を建設するという情報をいち早く入手します。

このため福島はロシアの東方進出に備えてシベリア等を視察する必要性を参謀本部に上申します。しかし福島の見解は当初は取り上げられませんでした。1891(明治24)年参謀次長川上操六中将から賛同を得ます。そこで1892(明治25)年、帰国に際し冒険旅行という口実でユーラシア大陸を単騎横断しつつシベリアを含むロシア及び満洲を实地調査します(40歳)。

1894(明治27)年8月、第1参謀として日清戦争に出征。1895(明治28)年3月、陸軍大佐に昇進。同年9月、参謀本部編纂課長、参謀本部第3部長、同第2部長を歴任します。

1900(明治33)年4月、陸軍少将に進級し同年6月、義和団事件鎮圧の為、臨時派遣隊司令官として清国に派遣されます。そして同年9月から翌年6月まで、今でいう多国籍軍の北清連合軍の一司令官として作戦会議で司会を務め、英、独、仏、露、北京語を駆使して活動し、各国から名調停役と評されます(48歳)。

1904(明治37)年2月、大本営参謀に就任し、同年6月からの日露戦争では満洲軍総司令部参謀として、これまでの経験を活かして謀報部において手腕を振ります。

1906(明治39)年4月、参謀本部次長に就任し、同年7月、陸軍中將に進級(54歳)。1907(明治40)年9月、軍功により男爵を叙爵し華族となります。

1908(明治41)年12月、参謀次長に発令(名称変更)され、同45(1912)年4月に関東都督に就任。1914(大正3)年9月15日、陸軍大將に進級と同時に後備役となり、同年11月、帝国在郷軍人会副会長に就任します(62歳)。

1919(大正8)年、東京雜司ヶ谷の自宅で死去。享年67歳。

3 ユーラシア大陸単騎横断 (1) 出発前

約一年半にわたる騎乗しての旅を想像してください。例えば、携行品は非常用糧食、医薬品、着替え及び日用品等はもちろん、冬季は馬の飼い葉も一緒に携行しなければなりません。しかも馬は約1カ月に1回位の頻度で蹄鉄の手入れもしなければなりません。1年を超える旅ですから、突然の暴風雨や大雪もあるでしょうし、道路も明瞭に整備されていないところもありますので、気象や地理は勿論のこと天文学にも通じていなければなりません。このようなことからロシア国内を移動する際は駐屯する最寄りのロシア陸軍または警察の支援を受けるようにします。しかしアルタイ山脈を越えれば蒙古に入ります。福島中佐は英語、ドイツ語、中国語、フランス語及び簡単なロシア語の会話ができましたが、蒙古では言葉も通じません。そこで案内人を雇うようにします。

ロシアの冬季の旅は厳しいので、難所と思われるウラル山脈及びアルタイ山脈越えは6月から10月初旬の雪のない時期に通過できるようにしました。その概略の経路は次の地図を見てくだ

さい。

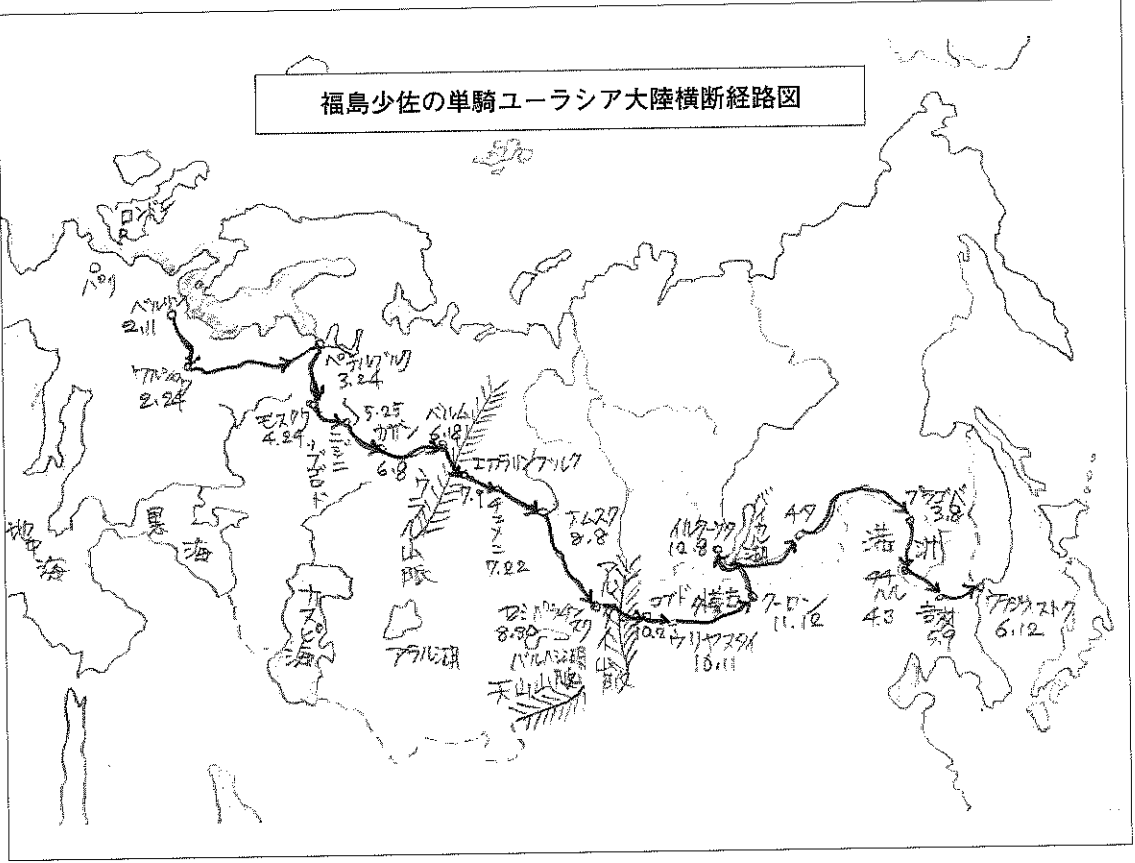
出発前の準備として、まずはベルリンの乗馬販売会社を訪問し、約20頭の馬から英国産の9歳の牝馬を手に入れ「凱旋」号と名付けます。これに鞍、毛布など40kgの他に外套を着た福島の本体重を合わると120kgになります。このような準備をしている安止の単騎ユーラシア大陸横断についてドイツは勿論のことアメリカの新聞にまでニュースとなります。

1月12日には多忙な準備を行っていた福島にドイツ皇帝ウィルヘルム二世から赤鷲三等勲章が授与されます。

(2) 独立を喪った国を通過しながら
福島は1893(明治26)年の2月11日の紀元節を期して雪降るベルリン

を出発し、三日目にドイツとロシアによって分割されていた旧ポーランド領に入ります。福島がポーランドにやってくるというニュースはここにも既に入っていたようで、多くの群衆が歓迎してくれました。その群衆の後ろに中年のスラブ系の女性が祖国を持たないせいか、寂しそうに自分を見ているのが印象に残ります。2月下旬にはモスクワに次ぐ大きな都市のワルシャワに入ります。今は主のいないポーランド王国の豪壮な旧王宮と整然とした優雅な町のたたずまいを見るにつけ、軍人の安止は「他国から支配された国民は

福島少佐の単騎ユーラシア大陸横断経路図



悲惨だ」と改めて国防の重要性を痛感します。ワルシャワでは4日間滞在し、途中馬が驚いて爪先立った拍子に馬の首におつかり欠けた前歯を治療します。また2月25日には騎兵旅団司令部を訪問します。この際、彼らから冬の騎行について多くの注意を受けると共に福島の高途単騎行軍の目的や途中の行動について多くの質問を受けます。これらを通じてロシア側は明らかに建設中のシベリア鉄道の状況を密偵することが本行軍の目的であろうことを察知し警戒していることがうかがわれます。その後に出発したジナブルグの峠越えでは3月中旬にもかかわらず、2m近くある深い雪と零下20度前後の極寒で凍り付くような思いを経験します。その後3月19日にロシア領に入り、リトアニア、ラトビア、エストニアのバルト三国を通過します。これら三国はかつて独立国として繁栄していましたが、この時はロシア領です。そして弾圧に耐えながら、地下で独立運動が続けられていることを聞きます。

(3) ロシア帝国の首都で

3月24日にロシア帝国の首都ペテルブルクに入ります。この間、42日間で1850km、日本の鹿児島から仙台間の距離を踏破したのです。ロシア側は福島の動きをつかんでいたと見えて、市の南門の10km手前で騎兵将校が

出迎え、騎兵学校の貴賓室に案内され、賓客として扱われます。3月30日福島は皇帝アレクサンドル三世への拜謁を仰せつかります。皇帝は福島のユーラシア大陸横断に非常な興味を抱いていました。初めに「少佐は何語を話すのか?」と聞かれましたので、「ドイツ語でもフランス語でも、英語でも、陛下のお宜しい言葉で結構でございます」と答えます。そこでフランス語での会話となりますが、福島が中国語も出来るのと知ると、皇帝は驚いて、語学談義にも花が咲きました。

ここで約半月間、人間と馬の休養を取り4月9日にペテルブルク騎兵学校正門を後にし、出発します。きつこの間、地下でロシアへの抵抗運動をしている要人と接触したのだろうと思われま

(4) 盗賊と遭遇

以降、雪の中を進み、夜は安宿に泊まりますが、暖房はなく寒くしかも南京虫に襲われ十分な睡眠もとれない状態でした。12日には吹雪の中、盗賊と思われる10人くらいの集団に出会います。道が細く、どちらかが譲らなければ通れなかったのですが、福島は腹を決め堂々と威厳を見せつけるようにして真ん中を通りました。すると頭目とおぼしき髭面の男が大きな声で部下に命令をします。その命令で、彼らは道

路を開放し脇に寄つて脱帽し、福島の通り過ぎるのを見送つたのです。きつと満身の気迫に圧倒されたものと思われま

されます。そこで6月下旬以降は昼間の熱暑を避け夜間に騎行するようにします。7月9日にウラル山脈の頂きに到達し、聞いていた石碑を発見します。高さ約4メートルほどの二段の石碑には「西はヨーロッパ、東はアジア」と記されています。安正は「おう、ここが欧亜の境界なのか」と感慨に耽ります。

脈を越えて外蒙古に入ることとします。しかし8月19日頃から「ウラル」号の調子がおかしくなってきました。そこで2頭の新馬をキルギス人から購入し、この新馬に交互騎乗しつつ旅します。しかし21日の夜に今度は自分が激しい下痢になります。「とうとう俺もコレラにやられたか」と思いますが、いざという時に使用しようとしていた阿片を服用します。翌22日、丸一日昏々と眠り、23日朝起きてみると不思議と下痢も治っていました。そこで、やれやれと思ひ出発します。

(5) 凱旋号からウラル号に乗り換えてウラル山脈越え

5月6日にモスクワを出発するも「凱旋」号の調子がおかしい。仕方が無いので予約しておいた警察部長の家に辿り着き、呼んでもらつた獣医に診てもらいます。10日にやや元氣を取り戻したので出発するも、1時間も歩くと道端に倒れてしまいます。そこで福島のみモスクワに帰り代替の馬を求めます。そしてこの馬を「ウラル」号と名付けます。5月18日に新しい「ウラル」号とともに出発するも暖かくなつてきた

せいか、虻、蚊、蜂、蠅等の虫に悩まされま

す。そしてここから更にアルタイ山脈を越えて外蒙古に入ることとします。しかし8月19日頃から「ウラル」号の調子がおかしくなってきました。そこで2頭の新馬をキルギス人から購入し、この新馬に交互騎乗しつつ旅します。しかし21日の夜に今度は自分が激しい下痢になります。「とうとう俺もコレラにやられたか」と思いますが、いざという時に使用しようとしていた阿片を服用します。翌22日、丸一日昏々と眠り、23日朝起きてみると不思議と下痢も治っていました。そこで、やれやれと思ひ出発します。

(6) コレラの流行する中を通る

これからいよいよシベリアです。帝政ロシアは労働力を必要とするシベリア開発に犯罪者や政治犯を送つていました。多いときには年間2百万人が送られたとのことにショックを受けますが、更にダブルパンチが襲つてきます。それは恐るべきコレラの流行です。8月2日に泊まつたツシムノロドバ村は戸数50戸にもかかわらず、新しい患者が12人にも及んだということでした。そのようなコレラの流行する中を

8月8日には人口3万人のオムスクに到着します。福島はここで5日間の休息をとり、12日にオムスクを出発します。急ぎの旅ならオムスクから東方のイルクーツクに向かうのですが、それでは建設中のシベリア鉄道の工事現場を直接見ることとなるため、ロシア軍から疑われないよう、オムスクから南下し中央アジアのキルギス平原を通つてセミパラチンスクに向かうこととします。そしてここから更にアルタイ山

(7) アルタイ山脈越えから外蒙へ

いよいよ目前のアルタイ山脈越えが9月に入ると予想されることから、手前のセミパラチンスクで峠越えのため6日間滞在し耐寒対策、食料の増加携行、案内人の同行、さらに外蒙古では通貨が通用しないために物々交換の品を準備します。そして9月6日に出発します。しかしキルギス人から購入した馬は見かけより山に弱く荷物が増えるとすぐ苦しうにあえぎます。9月17日アルタイ山脈の中央に位置するアルタイ村に到着。ここで二頭の馬のうち弱つて山越えが難しそうな馬を交換します。そしてこの新しい交換した馬を「アルタイ」号と名付けます。少し進んだ際に更にもう一頭購入し、この馬を「興安」号と名付けます。これで

福島は計7頭の馬を購入したことになります。二日間のアルタイ村滞在後、9月20日に出発します。

予想通りアルタイ越えは難渋を極めます。キルギス青年の案内で馬一頭がやっと通れる細い道を苦勞しつつ通ります。9月22日には今期初めての吹雪にも遭遇します。海拔が3kmを超えらるあたりからは、2mもの積雪で道も分かりません。その中を凍り付いたパンをかじりながら峠を目指します。やっとのこと24日に峠に到着します。眼前の清国領土を見て、はるか東方5kmの向こうにある祖国の安泰を祈願した時、やっとここまで来られたことに目頭が熱くなります。そして日本人として初めてアルタイ山脈を越えて、外蒙に入ります。入ってみて感じ

たことは、かつて草原を支配した蒙古民族も今は清国の支配下であり、しかも清国政府もこのような辺境には無關心なことでした。今やこの地には帝政ロシアの経済的・軍事的影響が強まっていることを強く感じます。そして10月2日に外蒙のコブト城に到着します。

(8) 蒙古高原

ここで案内のキルギス人の青年と別れ、蒙古人の青年を言葉は通じませんが、身振り手振りで雇います。

10月7日から11日まで川もなく、水

が手に入らず、馬は弱々しくなり、福島自身もどが渴いて苦しくなります。そのような中で1頭がついに倒れます。そこで代替に蒙古馬を購入します。

11月の始め頃から寒気が厳しくなり本格的な冬の到来を感じさせます。11月10日腹痛を起こしたので、この日は早目に村の暮舎に泊まり、医者がいるというので呼んでもらいます。50歳位のラマ僧の医者薬草を混ぜた薬を調合し牛乳に溶かし熱して飲ませてくれました。すると忽ちガスが大量に出て腹痛も収まります。

11月12日にクローン(現ウランバートル)に到着。福島はここから電信で参謀本部にクローン到着の報告を行いました。また自宅にも手紙を送り無事を知らせます。

(9) 再びロシア領へ

約60日間をかけて外蒙を横断すると福島は北上し、再びロシア領に入りバイカル湖の南岸を通りながらイルクーツクに向かいます。それはシベリア鉄道が敷設される際には、必ずこのバイカル湖の南岸のイルクーツクを通過すると予想されるので、その状況を確認するためです。谷川の木橋を渡り、山を越え、そして夜はオオカミの遠吠えに危険を感じながら12月8日にイルクーツク市に入ります。そしてシベリア鉄道の工事が未だここまでは達して

いない事を確認します。しかしイルクーツクではホテルに置いておいた荷物が勝手に点検され、尾行がついていような気配を感じ、17日に急遽東のチタに向かつて出発します。馬の鬣が凍り付く積雪2mの中を「アルタイ」

号と「興安」号の二頭を交互に乗りつつ移動し、バイカル湖畔から東へ110kmのチタの手前で正月を迎えます。おりしも零下30度の寒さに風邪をひき3日間寝正月となります。回復に伴い1月4日に出発し、14日海拔1200mの峠にさしかかります。丁度ここが分水嶺であり、この峠から西に流れる川はバイカル湖に、東に流れる川はアムール河に流れることを知ります。

そして1月15日にチタに到着し、6日間滞在します。チタではロシア皇帝に拝謁した際の参謀将校が州知事参謀長をしていましたので、滞在間同参謀長の世話になります。ここで疲勞の目立つ「アルタイ」号を交換しようと思いましたが、「興安」号から離れようとしません。そこで馬達の友情に免じ足を引かず「アルタイ」号の積み荷を降ろし裸馬にして同行させることにします。1月20日新しく購入した「ウズリー」号を加え東に向かつてチタを出発します。しかし22日にチタの警察部長から早馬伝令が追いかけてきて妻からの手紙を受け取ります。内容は「天

皇陛下が単独遠征を嘉賞され、御内帑金二千元を御下賜あらせられた」とのことであった。陛下が自分のユーラシア単独横断を御存知になったことを知り感激します。

(10) 怪我と病に悩まされつつ満洲へ

零下40度の極寒のシベリア横断も寒さにも慣れ凍傷にもかかわらず騎行を続けます。ベルリンを出発して1年後の2月11日(紀元節)、零下50度の中で今までの旅が無事であった事を神に感謝します。しかし福島はこの日、九死に一生を得るような怪我をします。それは馬から氷上に転落し、頭部に深い傷を負い、意識を失ってしまったのです。案内のため同行していたコザツク騎兵が、福島が追いついて来ないので戻ってみると、意識を失い頭から血を流している福島を発見します。そこで直ぐに近くの農家に運び込み、救急処置を施します。安静5日間で出血がやまと止まります。そこでまた東に向かい、3月20日に氷結しているアムール河の上を通り満洲に入ります。3月28日には暖かくなってきたため自然発火したと思われる野火に襲われますが、巻き込まれることなく逃げぬけました。しかし4月18日に急に右の耳下がり腫れ頭痛がするようになり、19日に村の宿屋に倒れこみます。呼んでもらった医者の見立てでは「有火」という風

土病とのこと。連日高熱が続き18日間も昏睡状態が続きます。祖国まであと千kmあまりのところまで来たのに、こんな満洲の田舎で果てるのかと無念に思いますが、なんとか元気を回復し5月7日によくやく出発することができず。

(11) 日本海を望む

6月1日、満洲と朝鮮を隔てる険しい山を越えると、福島は思わず声を上げます。「おう、海が見えるぞ！」

前方遠くに見える青い海は日本海です。福島の両眼から涙が滴り落ちます。そこからは再びロシア領に入り、6月12日ついにウラジオストクに到着します。ちょうど1年4カ月で1万4千kmを踏破し、見事にユーラシア大陸を横断したのです。

4 何故ユーラシア大陸を単騎横断したのか？

(1) その背景

ア 欧州各国の動向

福島安正が赴任したドイツの東に隣接する国は16世紀から17世紀にかけてポーランド・リトアニア共和国というヨーロッパにおいてオスマン帝国に次ぐ大国でした。その領土は、北はバルチック海より南は黒海に至る大領土を誇っていました。それが国防を疎かに

していたために近隣のロシア、プロイセン、オーストリアによる三度の領土分割により統治すべき国土を失ってしまっています。1794年に軍人のタデウシユ・コシチユシユコが中心となり蜂起しますが、ロシアにより鎮圧され、1795年にはポーランド・リトアニア共和国は地図上から消滅してしまい、国民は流浪の民化してしまいます。この現実を赴任した福島は目の当たりにして国防の重要性を再認識したであろうことは想像に難くありません。

(イ) 欧州各国の東洋進出

1588年イギリスは当時世界一と言われたスペインの無敵艦隊を撃破し、強力な海軍国となります。以降英国は「七つの海に沈む陽なし」と言われるほどの大海軍を建設して世界各地に覇を唱え始めます。その大英帝国が次に狙ったのが、当時世界一の紅茶の産地であったインドです。1600年、英国はインドに「東インド会社」を設立してインド侵略の一步を踏み出します。この様子を見たオランダ、フランスも同様に東インド会社を設立します。このようにして白人社会による東洋の蚕食が始まります。その後、イギリスの産業革命やフランス革命、ナポレオンによるフランス統治等がある暇はありませんでした。しかしナ

ポレオンがワテルローの戦いに敗けると、欧州にも平和が訪れます。すると再び海外進出に目が向けられるようになり、1819年にイギリスはシンガポールを占領します。次いで1824年にはビルマに戦争を仕掛けます。そして1840年には阿片戦争を清国との間で起こし、香港を奪い取ります。これらに呼応するかのようになっています。そして英国は東洋との間の航路を短縮できるようにと1869(明治2)年にスエズ運河を開通させます。

(ウ) ロシアの極東進出

欧州列強の東洋進出の状況に呼応しロシアも極東への進出を試み、1849年にカムチャツカ半島に軍港を建設します。しかし冬季にはこの港は結氷し使用できません。ロシアの南下政策はヨーロッパ正面においては1853年56年に起きたオスマン帝国との戦争です。しかしイギリスとフランス等がオスマン帝国を支援します。このためロシアが敗北します。このようなこともあり極東での南下政策がすすめられるようになります。まずは沿海州を領有し、ウラジオストクに不凍港の軍港を建設します。1875(明治8)年には日本との間で千島列島(日本と樺太(ロシア)交換条約を締結し、ユーラシア大陸の東方で北海道の北方

に位置する樺太全土を領有します。イ 当該背景に基づく福島の考え

ドイツに赴任した福島はこのような欧州各国の動向に基づき軍人として国防の重要性を再認識し、いずれの国がどこから東洋に進出し、どこでどのような戦いが起きるかを考えたのです。開国し、明治維新を経てから30年前後しか経っていないこの時期に未だ戦略(ストラテジー)とか情報(インテリジェンス)という軍事用語はありません。ドイツから招聘(1885年、1888年)したメツケル少佐も戦術は教えましたが、戦略は教えませんでした。また情報もメツケル少佐が提示するだけで、どのようにして取得するかは教えませんでした。

このような時代に福島は「いかなる敵と、いつ、どこで、どのように衝突することになるか」(川上参謀次長宛書翰)を考えたのです。

1886(明治19)年にインド、ビルマ方面を視察し、『印度形勢摘要』を著わし英国の東洋進出の様相はおおむね把握できていましたので、今後はロシアのことを、また戦場として予想されるシベリアや満洲に関することをも現地を確認する必要性を考えたのです。

(2) 直接的動機

福島安正の略歴を見てわかるように、彼は明治陸軍で最初の本格的な情

報將校です。その情報將校がユーラシア大陸を横断し、自ら実地にシベリアを含むロシアや満洲の実情を探知する必要性を痛感したので。

それはドイツ公使館付武官としてペルリンに赴任した翌年の1888(明治21)年に、「ロシアが東洋進出のためにシベリア鉄道建設を企画しつつある」との情報を得たからです。この鉄道が建設された際に軍事上に及ぼす影響は明らかです。当時は欧州の兵力を極東に運ぶためには希望峰をまわる海路を使うしかありません。しかし海路は氣象の影響もあり時間と費用がかかり、また列強の領海を通過しなければならぬので、英国などから干渉される恐れもあります。しかし自国の領土に敷設した鉄道で運ぶことができるなら誰も口出しできません。

このようなことから軍事的に重要な影響を及ぼすシベリア鉄道はいつ頃完成するのか、そしてロシアと闘うことになった場合の予想戦場等について現地を確認すると共にロシア軍に直接触れ、その特徴を探知しようとしたのです。

そこで福島中佐は軍当局に、「露西亜ノ東洋進出ニ備エテ実地ニ檢分シテ今後ノ対策ニ資スルコトコソ最モ緊要ナリト判断ス」というユーラシア大陸横断の上申書を提出します。

福島のこの意見は參謀本部の同意す

るところとなります。そして明治23年11月に參謀本部次長川上操六中將から「主旨同感、直チニ詳細ニ実施計画ヲ立案シテ騎行申請ヲ提出スベシ」との返電がもたらされます。

案の定、1891(明治24)年1月にロシア皇帝アレクサンドル三世は次のようなシベリア鉄道建設の宣言をします。「シベリア鉄道の建設はまさに歐亞内陸交通の幕開けであり、特に超長距離、広軌式鉄道の形式による交通革命ともいえるであろう。実にロシアにとつては世紀の大事業であり、世界文明史に画期的な貢献を成し得るものと信ずる」

駐在武官たる福島が公然とシベリア等の情報活動を行うことは許されません。そこで福島がドイツ駐在武官を任期終了するにともない、その帰国を、個人の冒險旅行としてヨーロッパからシベリア大陸を横断し、日本海まで一人で横断するという形をとったのです。

しかも騎馬を用いた理由も福島の次の言葉でわかります。「この間の行程を詳観して他日に備えるため」、「騎馬の騎行は1日僅か40km程度しか進まないが、山に登り、河を渡り、平野を通るなどしている間に地勢・地理を觀察することもできる。(略)兵勢の調査についても山間僻地の一小哨までも訪れて親しく兵と語り、その感情と挙動

を細やかに觀察しなければ、兵勢の実情を探索したとはいえない。予の騎馬騎行は小と大とを詳観し、これによつてよく内情を洞察せんが為である」

5 何故情報活動を目的とする単騎横断ができたか？

(1) 參謀本部から情報將校としての福島への期待が大であったこと

福島は清国・朝鮮を実地調査し『隣邦兵備略』を著わし、情報將校としての頭角を現します。そして清国公使館付武官時代に『清国兵制類集』という大作を著わし、情報將校としての地位を不動のものとします。さらには英国の東洋進出状況をインド、ビルマ方面を視察し『印度形勢摘要』等を著わしました。

このように見てくると、福島がドイツのベルリン公使館付駐在武官として赴任したのも、參謀本部として福島に欧州各国の東洋進出等の状況を探知させることが目的ではなかったかと思われまふ。

その福島がドイツに赴任するやシベリア鉄道敷設に関する情報をいち早く入手し、その影響が大なることを報告してきます。そして情報収集を目的とするユーラシア大陸単騎横断の必要性を上申してきたのです。当然のこととして參謀本部においてもその必要性を

認識し、福島なら実りある成果が期待できるとして、參謀本部次長川上操六は「主旨同感」と返電したので。

なお福島は士官学校や陸軍大学校を卒業していません。日本陸軍をドイツ軍制に変えるため招聘したメッケルからも教育(1885年~1888年)も受けていません。もし福島が士官学校や陸軍大学校を卒業していたら、情報將校ではなく作戦將校の道を歩むこととなったかも知れません。しかし作戦畑に進むことがなかったからこそ、異なる情報の道に進み、このユーラシア大陸を横断するという機会を得たのです。

(2) 語学の天才で、英語、フランス語、ドイツ語、中国語、ロシア語の会話が自由であったこと

語学の習得は言葉覚えることから始まります。そういう点で福島は記憶力が抜群でした。その端緒は祖母の教育にあります。福島は二歳の時に母を失い、父は江戸詰めであったために、日常は祖母が世話をしていました。5~6歳の頃にその祖母から百人一首を教わります。「無論それは口移しであり、文字を覚えるのではないが、段々に覚えていくうちに全部暗記してしまつた。そうすると今度は祖母が下の句を言つては、上の句を私に言わせるが、それも間もなく出来るようになって

た。これは私の暗記力になかなか為になつたと思う」と述べています。このような祖母のお蔭もあり記憶力がずば抜けていたところに、17歳の時に藩命で江戸に留学し開成校で英語を学びます。そして21歳には司法省の英語翻訳官になります。

また明治12(1879)年に清国・朝鮮などを実地調査した際に英国のスパイになつている清国人と付き合い、彼から支那語を学びます。

その後、1887(明治20)年3月ドイツ武官に赴任する3カ月前からドイツ語の勉強をはじめ、赴任間にドイツ語はもとよりフランス語、ロシア語(本横断間)を修得しました。

このようなことから現地の人との会話に全く問題が無く、一部中央の要人の発言だけでなく、兵卒や住民の考えに根差した情報をも取得したのです。

(3) 地理、気象、天文学の知識を身に付けていたこと

福島がユーラシア大陸を横断できたのは、自分の位置を地図上(現代のような正確な地図ではない)で確認することができ地理や天文学の知識があつたからです。さらに雲の状況や温度・湿度等から今後の天候を予測し準備に怠りがなかつたからと思われれます。このことを福島はどのようにして身に付けたかは不明です。しかしきつ

と榎本武揚から教えを受けたものと考えられます。榎本武揚は幕府の海軍伝習所の第2期生(1856年)です。ここでは航海や操船技術の他に造船・語学・数学・地理・蒸気学などを教えました。オランダ人教官カッテンディーケは、その著『長崎海軍伝習所の日々』で成績優秀な榎本武揚を褒めています。榎本はその後(1862年)幕府派遣の15人のオランダ留学の一員となります。3年間留学し、帰国するや軍艦奉行および開陽丸の艦長に任じられます。きつと留学中に艦長として必要な航法等に関することはもとより、地理、気象、天文学等の知識を一層身に付けたと思われれます。

この榎本と福島との出会いは、榎本が清国公使をしていた明治15年9月、福島が清国の国情を探索するために入国してきた時です。榎本は福島の積極的な性格を気に入り、臨時公使館付武官に採用しあらゆる便宜を図ります。その際、未知の土地を行くのに必要な地理、気象、天文学等を伝授したのもと思われれます。

しかも榎本が駐露公使の任を終えた時、福島と同様に帰路をシベリア横断し帰国します。それは当時、ロシアがトルコと戦争状態にあり、ヨーロッパ廻りで帰国出来なくなつたためです。

1878(明治11)年7月23日〜10月

2日まで79日間、ペテルブルク〜ウラジオストクまでを鉄道、馬車、船舶を乗り継ぎ従者三人と旅をしました。福島安正のシベリア横断は榎本武揚の横断から14年後であり、福島は出発前に榎本からシベリアの地理や気象について詳細な助言を得たと言われています。

(4) 「剛健」の精神が宿つていたこと
福島は、晩年、特に帝国在郷軍人会副会長になつてからは、師範学校、中学校、小学校等の生徒に対し「剛健」精神を熱心に啓蒙して全国を講演行脚しました。

この「剛健」精神があつたからこそ、ユーラシア大陸の単騎横断の1年4カ月間、猛暑や厳寒と戦い、悪疫コレラに襲われ、毒虫や病魔に悩まされ、負傷数回、中には九死に一生を得るような怪我を克服し、この壮挙を達成したのです。

福島は「剛健」精神について馬上講演「剛健の修養」で次のように述べています。

「身体を丈夫にすること。何故なら「たとえ如何に頭が良くつても身体が弱かつた日には、やりたい仕事があつても之を如何ともすることができない」「男児生まれて大事業を成さんとすれば、どうしても身体を丈夫にしなければならぬ」
そして「勇氣は人間社会生活の一切

を支配する原動力」である。しかもその勇氣は「蛮勇でなく真の勇氣」を持つて、「古今の英雄もこの勇氣があつたから英雄たり得た」、そして「凡て勇氣あるものは常に真面目である。孔子の所謂『言に訥にして行に敏なる』(筆者説明・立派な人は、口数が少なく、機敏に行動するよう心がけるものである)ものである。浮華を避けて質実に就くものである。斯くて人に最も尚ぶべき『剛健』の氣風は自然に充滿するに至るのである」と語っています。

6 おわりに
明治維新から26年しか経つていない時、当時の多くの日本の国民は日清戦争の起こることも知らず、ましてや日露戦争が起きることなど夢想だにしていません。そのような時、福島は近い将来に日露戦争がありうることを予測し、ロシアの政情や陸軍の実情、シベリア鉄道の建設状況さらには予想戦場たり得るシベリアや満洲の状況を自分の眼で見つつ肌で感じる情報を収集したのである。

帰国後の報告書に次のように書いています。「抑も天下人大勢、列国ノ実力ヲ熟察シ、細心精密、予メ之ニ備ルノ雄略ヲ画策スルニ非ンバ、焉ゾ能ク蚕食吞併ノ今日ニ在テ、屹然トシテ東亜ノ形勝ニ独立スルヲ得ンシ。(後略)」

(筆者意訳) 今天下の情勢を考え、列国の実力を考察し、これを正確・綿密に検討し備えなければなりません。東アジアでは国家が他国に蚕食されたり、或いは呑み込まれてしまうような状況が続いています。このような考察をしないようでは自国の独立を保つことはできません)

そして最後の結論は、「ロシアのシベリヤ鉄道建設の完成を今後10年以内と予測し、これにより日露戦争の可能性に備え、戦略計画をたてる」ことの急務を訴えたのです。

この11年後にシベリア鉄道は完成し、日露戦争が始まりました。福島の慧眼とその行動力に、ただただ感心するばかりです。

また、福島の報告書が日露戦争準備及び戦争間に戦場地域の地誌やロシア軍の行動を把握する上で極めて参考になったこと。さらに記録としては残されてはいませんが、本横断間に得たと思われる人脈等を通じ日露戦争中ロシア軍の後方擾乱に極めて貢献したと言われています。

最後に、「剛健」精神を涵養する第一は我慢にある」と福島が述べていますので、これを紹介し本稿を終えます。

「元来人間の身体や精神は鉄と同一であつて、山にあつて誰も構わぬ時に一介の石に過ぎぬが、一度之を採り

来つて鍛錬すれば、その鍛錬一つで立派な鋼鉄艦ともなり、四十インチ五十インチという如き大砲にもなり、又昔の名刀正宗や村正にもなる如く、鍛えれば鍛える程益々丈夫になり、切れ味が良いのである。而して此の鍛錬には何が必要かと云うと、我慢と云うものがどうしてもなくてはならぬものである。蓋し鍛錬とは自然に具わつて居る性質以上に、使用する其の目的に十分副うだけ、外物に対する抵抗力を与えるのであるから、我慢が無くては鍛錬を加えたくても出来ない。(略)人間は何でも若いうちは、自ら進んでも沢山の困難に当たつておくがよい。その経験は非常なる心身の鍛錬になると同時に、強き自身力の基ともなるのである。(略) 情欲に反する我慢、即ち鍛錬は苦しいであろう。楽でないかもしれない。然しながら苦楽畢竟何であるか。もと同じのものであるが、之を受け取る吾等の心の持ち方によつて、或いは苦にもなり楽にもなる。所詮は心の所生である。さればこれには数字のように、何処でコンマを切つたら良いという際限がない。例えば今支那の内地を騎行するとする。で夜泊まつて見ると土の床で、その上に敷いてあるものはアンペラと云つて、茸を細く割

いて編んだ蓆、日本の畳なぞとは同日の談ではない。然もそれには彼方此方穴が開いて居て、そこから下の土が無遠慮にはみ出して居る。静かに塵埃は一杯で、座るにもなるべく静かに座らないと大変である。若し乱暴な座り方でもすると直ぐそれが濛々と立つ。余りに汚いから掃除をさせると、一度に塵埃が立つて静まると矢張り元の通りになる。それで鼻の孔が余りにくすぐつたいと云うので指で探つて見ると、くすぐつたいも道理。汚いその塵埃や砂が真つ黒に溜まつているという始末。斯う云うことであつたならば、誰も恐らく日本の内地の楽しい生活などを思い出して、之は苦しいと思うに違いない。然るに翌晩になるとどうかと云うと、家は前夜同様の家でも戸障子は一面に破れ、戸外の広い所には馬糞が山のように積んであつて、風が吹くとその破れた戸障子の間から、此馬糞の埃が盛んに飛び込むというようなこともある。そうなると前晩はまだよかつた、馬糞も積んでなければ戸障子も完全に、馬糞の埃も吹き込まず臭気もせず楽であつたと云う感が起る。ところが更にその翌晩となると、もつと酷い。泊まるにも家が無い。止むを得ず草原の草の上か、或いは流れの傍などに野宿しなければならぬとなつたらどうであらう。例え馬糞の山があつても、鼻持がならなくても、兎に角露を透ぐ屋根の下に眠ることが出来たか

ら楽であつたということになる。これは困苦欠乏の方の一例であるが、更に贅沢な方面へ行つても同様である。(略) と、いう様に、苦しいのにも際限がなく楽なのにも際限がなく、苦しみの上には上があり楽なのにも上へべき単位というものはないのである。詰まり苦は楽のより少ないもの、楽は苦のより少ないもので比較上のことだが、然もそれさえ更に考えて見ると苦必ずしも苦に非ず、楽も必ずしも楽に非ずして、元来同一のものが心の持ち方次第で苦にもなり、楽にもなるのである。従つて楽を追い懦弱に流れ始めればいくら楽をしてもこれでいいと云うことなく、無際限に墮落し、自ら苦を求めて心身を鍛えて行けば、これまた幾等でもそれに打ち勝つことが出来るものであつて、初め多少苦痛と思つた事も、終には何とも思わなくなること、私自身の経験に徴して堅く信じて疑わぬところである」

【参考文献】

・東京朝日新聞(明治26年6月13日~30日)

・「亜細亜横断記」單騎遠征録」福島安正 満

鉄・弘報謀編

・福島大将講演「剛健主義」東京川流堂発行

・福島安正馬上講演「剛健と修養」忠誠堂発行

・「福島安正と単騎シベリア横断」島貫重節上・

下 原書房刊